

“宗教をもたない者達の供物は”

古来の精神的儀式としての供物（自然に対する畏怖から生まれた供え物）と、権力と結びついた宗教の中で生まれ擁護されてきた供物（宗教美術作品）、それは神々への賛美、祝福（言い換えると権力への賛美、祝福）だったのですが、どちらも人々が何かを信じ、それを賛美、祝福するための祭事に供え物をしたのでしょう。

現在、高度に発達した情報社会の中では自然に対する畏怖もきわめて少なく、宗教が権力と結びつかなくなり、また、その機能が慣習的、儀式的になった今、何に対して恐れをもち、どの神仏に、なにの願いをこめ、どんな精神のみかえりを求めて、供物をささげるのでしょうか。

しかし、宗教という言葉に過度に敏感な現代人も何かを信じているのは確かでしょう。生活、仕事、物、社会、祭、夢、等々、（これらを宗教上の神仏とおきかえることはできないが、現代人の精神的な生活から離れた消費的生活においては、それに近いものがある）どちらにしても、信じていることを個人が賛美し、祝福するために捧げる供物は何なのか、一般的社会生活の表面にはそれがどの様に見えるのか、美術家としての私にとって、何が供物なのか、そして、それをのせる台はあるのか、そして供物が供えられる台（場所）をとりまく社会をどう認識するのか、を“供物”というタイトルの作品をどうして考えていきたいとおもいます。

1994年 3月 6日 吉川 恭生